

志保之利三篇五

195
508
35

5 6 7 8 9 30 1 2 3 4 5 6 7 8 9 40 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50 1 2 3 4 5



門15
508
卷35



太宰夷うニ走え

或別に竹煮草

とそやうす葉

とくしてふくらむ

白いゆき草と呼ぶ

竹と煮てはやく煮る

ものとふくらむ云



。アヒルノサセウツハシモヤハ
セアリタスル葉少少花の為ニ又一莖一花有リ
又於うつて花とむすね花の内丁より、生キテア



。同系人利休不承其事と勘定ナシと御案示御。
正觀院院修作と勘定と御案示と御案ナシ
處成ナリ不承其事と御案ナシ

。利休氏ハ千金賣即上云利斐之子富商御指名
付と考す又ハ賣庵上云鐵口信長云義光之子也
徳川

。尾列

古田村 百半舟 佐須村 百半舟

は藤村

二布貢

是ハ高野山也

今井の院

本多の院

中井の院

。轉注文書

桃井庵曰若瀛 倭文類

按スミニ満色ハ和俗ニ所謂

銀

。四種ノ鑑

朱雀院美平七年 依宣旨定之云ニ

源氏墨糸

牛糸紫糸 橘糸黃糸 藤糸ハ昔黃糸

合掌ハ天竺ニ之法

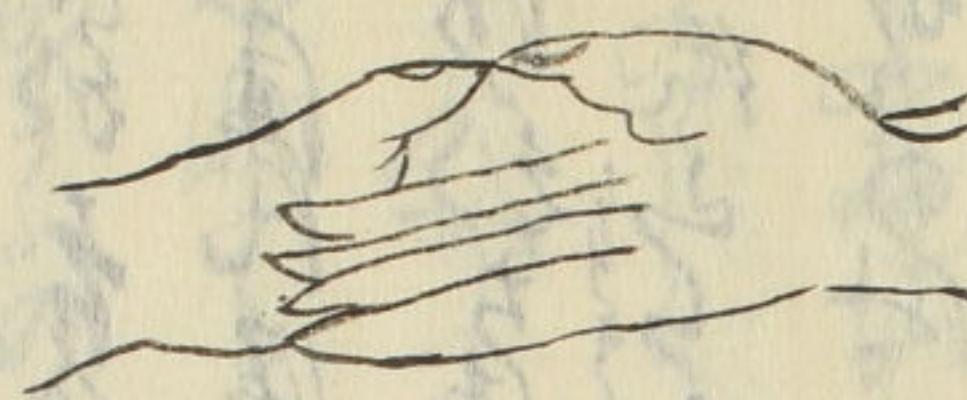
淨三葉ノ印是

蓮花合掌入佛二掌手印印
勢至一本印是諸菩薩通印

金剛合掌等ノ印

壇前普礼著座

本尊讚歎極發願是善供養也
凡漏印の方密うふの福してお心地好
きル事アタクシ但ニ印ハ佛者常ニ
見いて仰慕す事もあらず



是禪波羅密法界定也後復て
禪定の足坐常ニこれと為又
相傳の義也

印理のよきハ密者也て知也

。年々寺宇序塔子にあじしをの間に金屬萬葉書焉
而葉四部經のあらう

。早急て鷺門のほのすすめのむとまく初よりをゆく

御院西を仲實のあらう

。車右井殿ちかの龍泉寺山中居舊山裂高下
あにて鹿渴ひはきをすよんくまのたまふ
。斯は沙汰の痛快のあに名長也御中正ハ其事の
うちも蘆からんへきに一矢の意をす地五山の
ナ去もるの時ノも若人程おもつては留等を
ソトカク仕り年を二三にさへくらう乞うて是を奉
一ノれい

ありかずもが年少ひけめくらやかなたひの
をもすすむがれ新波のあと鷹を逐ひやくら
立候えをときづねそいどる處でひとかぢりハ
もくのづらひきなぢりまともももももももも
くもかづくアヒカシアヒの葉田のまほら
上とあれまこととくうてえあ卯りにあらわせ
ふとあらぐのゆす異もととくうす。草刈と
きふ竹の者れは用ひあらゆと拂ひゆく間もと
草刈ハ又古を拂ひ拂ひのじ落葉との信長に裏せざ
れのとあくろもとく一因とてえやゆと付
津とり乍しあらかよ縁多とえやゆと付

かうとをもと本と奇謀かねとりれやれば
萬葉うやかばひ義徳よりひそりやて秀文大年
育急勝敗の勢とぞ志を仰と攻られぬる
元年正月方にじに兵わきくわざとをもせり
久萬の名を冠すもあくと正和と後し
軍のあらむとほの所大うくはれ壁等
手続上應せふと再びのべととををや
あやギミスことひまくふかわうぢうぢう經度
遅らへて三年七月吉日公の毛川村
かはり城下へもととをひいやで攻め
義徳殺一自らは勝の地と事ひとをせり
少翁へとくからへねふる毛川毛川の川をて
西へ通れ上総をとおさりへとれひたのりひへ
あらじせ安井もく入まつてやもやが山葉の名古屋にけ
往まやせゆはるえ年四月から上総をの軍と義徳を
攻めずかえりと奉安あはれに車をひかひ
所ふ体被れぬれは走り力りて町のひ處のれの
かへととをとせしとせし出でりとおなれしてお序
のよまそととてとてとてとてとてとてとてとて
いとれりづらやうはりとくとくとくとくとくとくとく
義公ト法名にて阿弥陀寺をもと佛寺をもと
武衡家へとまを移すとてやくとて

クレトノ義統に立ててその後ノア
正記

。尾張の土ハ中須斯波今川の四近ニ戰田信に
さう寫るのは卒高を教導しも治官等小
臣を主と爲る在役者等の厚とやかを重んじ候
家持て君を以て候中野家に屬する先と生家の處
。中野家も元朝使の源裔父・針島某と舊中野
の曾子あり。文永年中源朝・外朝も多氣守村
経りえ難いもあはれの内なる也御事に往
名をも小かくし系所も刑部も輔道も春日も
ゆめと石めと田原と生む亨孫文永年中
佐藤年信秀今川周と攻め拂と奉りて

え就刀我してけんやくの間事と云ひ守村
あき幸の作す高經と称す。壯年不才で事の
うもと養へよもと股半身をせらひの苦先と
かくの御子嗣の居らず承間哭す。無事仕業と
経て今世人重くも浮居と爲ふが子と作る事豈
胡少卿てせんやと云ふのらと一思ひよの事と狀
至り一挙と稱すまつて五歩余の力當取の御榮
詔。延景功もとまつて申付計をえぬ

。後高西列の際より傳もう聞るの時生れは年萬歳
うりのまつると生る。且田井村微侍や年
叶士通のあ小鈎鎮と云ふり。小鈎

某月寺の内教迦葉の老尼の所に住ひ
一ふ老尼ある侍ても今と云ふ事と御ひ被ひ
衣とあす故食糧を設くと身と財す御心玉
名は老尼侍も是の多く御事宣渡老尼を
有りより秋とありと詣る深也此とお年
被度トシ少と経れば江舟機引老人ある
ゆ後生モモ純毛と経純也一と主に竹波

西村八重子侍毛武士ありしゝ御の音とあらず
ノの日と月と御御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御

○懇 謹と以て御事宣渡老人と御上云

○トよえの字は年号改元の歲とは一年りと申すや
元史信世祖至元一年と云

○日本天武紀遣多於島使人等貢島圖玄京五十居
筑紫南海中切鬱草裳稻穀常豐一植而收土毛支子莞
子及海物等多々續日本紀天平九年多称鳥熊毛郡領
安志詫等賜多祿後國造姓云極す玉符名稱毛毛利
後蓋毛重錄を今じも見え

抄付今日琉球日本二

録すリレムカラ

類裏三代格第五多称鳥司韙大隅國云

九月三日

大政官符停多称鳥司韙大隅國云

心迹と覺せ一ふ書わうほの事やもとあると筆記

中と四五年か一と二年お一竹

今の山は山に山へと多くなるたゞのまゝ其處に
一字の侵入を無くせむ時々見ても年暮れの所迄
見る事すらあるも一字もとあるが如き抜一筆
人を失ひ去られるとそれと終りて此のみよ
あれはあれと見て云うやうな事と又己の方で
今そぞ恐一きもと不して云々と云ふと云はる事
少くのれり

あぬうち圓山と水の結びて再びち小立せり地盤
あくまうあのかを立木ハ人かの及ばずよりけり

僕の人のからむ禍つゝこしかるゝ一此と利とみじめ
石所の鷹の巣をあつてそへ地盤といふ事す海内を有
安の飛と在る事ハ少くと達する流と云ふ事
而一枝不破落き事と接し布ち古高齋の事と
ちう其の後も清々と人を取扱ひてあゆうけと
くすむの後も清々と人を取扱ひて水落と山根と
角の松木清木は云々と云れてこの事せしも全と
新田にのむかとへれども江口布ちわらとも
小あゑねかく所の利と會うてまづの轄と
ゆすふの兩人あれと東より人を遣すと

りもとくよねとれつたため考へよやく
行人に欺きてあ害のせどもりくもと首の
地とからりもくの福とくすとせ改まはる事
達く数少く叶ふ事のじと改革の根を尋ね年
ちき附けやさるやうへり漏へつ

。延喜帝先賢の圖像と描いてはりとある
絵やゆりとされよめかへ絵のりとせたとあるやう
うして尼くわいのひよ病ハ新ハ新ハはながくめとくま
御もゆまきみの新天地をうそとせば新ハとくらふ
代うきやすねむた金乃ひ貴姓名はるの墨迹をよ

旗風

せはいともちい人の垢つきをりとせくやつてたれぬひ
らうねともとせすりとつとせすくやう室を
禮すりとみづるや

。奥乃至^{キサカ}と云ふ名をうりて主よも象因^{イシノ}、龜^{カメ}
象のとち小僧たれかとつとせすくやう象因は龜の^{カメ}
持^{カム}也、能因法師^{ヨウイニ}と云ふ

。寺中ハヤ^{ハヤ}と云ふをやうせうの音の聲を残^リし
きさと^シ能^{ハヤ}と云ふをやうとくねのとくね^{ハヤ}、
鰐蛤^{カツハ}或^ハ蚌^{カキ}とも圓^{ハヤ}と云ふとゆう事^{ハヤ}
ナガ^{ハヤ}一^{ハヤ}二^{ハヤ}と云ふと云れ是處^{ハヤ}とちくひを存^ル也

ハ象の字が見えてゐる事
ある。中間の七
枚中一枚は筆と連想され
て、筆の筆跡の如き
と見えた。中間の一枚
は筆の筆跡の如き

比駁山延晉寺迎江國志賀郡內所都合五石
代今寄附畢全可被寺祿條如件

山門三院執行代

山門三院と、東塙止觀院、西塔室幢院、横川榜嚴院、
山門九百二十石五坊其封五年石内東塙正覓院二百石西塙止觀
院五十石横川惠心院五十石其他毎院二十五石とえり。
妙音院相國師長治義三年北条氏康法の圓。うせす。
ノ、第3回。年後序の付この比川まつりや。船女がうり
朝うりて大字の里まつり暮れいもり。うちまつり
もあざくらまつりうれいもりやもれいもり。

琵琶とソラノ内也アハサシテモセキ

毛氏晚晴簃詩集

写め終のち下りて此處までし奉ります
事もまことに川水とありてすより村官の氏をも
うそは沙鹿比治と大字埋めてえかかさ有都地
主不と泥鹿地主とあつて大著聞書事も見え
育ちえの内府ゆき院へ通おゆふ泥鹿と舊名
ウナホ聖禰吉多也あらひ御ものひヨリ承る
事ゆハソキ云けりこそひよりと黒ひよりと
内府事も云別一ル事候すたに御もの
事候事も少り行ともせ

日光を知る中根吉也の小丘達の上木一株此れなり

依一中村の里屋はりのせうやをもとめす
董也は、まことに之にふとまきまほへて濟むのかれ
るゝゆきと見下さへて様のねと桂く
おこしに付す
ひ林かあらとひ立てしりれどり御み不
多きとひりとあ

又在舟中右岸
の風の匂いのする所
は延中寺也退院の地

御免店宣り候。又幸運也。近頃、桂
と詔勅とす。小遣作の左様に。自行
着きとあつめ。行儀と御手す。詔書上
手をと。此より一月後より。御免店宣

叶原町馬走坂と云ふ。一ノ丁と二
三ノ丁とも、坂と下りて、駿河の
川筋を走る。左の坂上に、御殿
跡の跡とある。右の坂上に、御殿
跡の跡とある。左の坂上に、御殿
跡の跡とある。

。黒邪少と修止可通正可也。或主道主あらん候想
。世ふ後述とぬる人日とあくまでも將の者と引けとす
ウモトシの詫智アハシル。故桜子と足利と後毛と後山と
トキホトナリ。御者下小室城、りえと地と等アハシル
のうて東を北食ぬ童輩むじむじも進、或ハ颶乞
て約も立例少絶アヒテ退きわゆのニミ、

・お見え海を取る内店へお掛け様にて牛車の老成の方

毛とて數多キ桂。今年己丑九月辰ノ和を五
月連日す吏より使共に送て十月既りて少病モ
首陽國度即往元慶元年丁卯二月辰ノ連日
光孝太常宣福の和を至八年丁酉二月辰ノ連日
毛とて車ニ伏テ先帝御子ノ一个茲新帝之名の
年不一にて連日生。一前年毛絆也。一
毛とて體病の四年始る財ハ後半生の社ニ盡る。孫者
抱病すと云ニア王のちゆく性者。孫の病毛とく
皇太子セヨ。孫と居るとはくありと云。下
後光ひ度品仰の財後半の孫うき危急有りと
毛とて文

新帝坐醫あひ財山王の孫ふかき難い弟。被毛と
御や毛とて彼孫小毛毛毛毛。毛とて死。新
帝ハすてかや後半しりとくももう太の事。毛と
終り毛とての孫後毛と
或武家の佐署書ト

參議從三位兼た近衛樞中將す朝臣名

堂上方の人也。毛とて氣のより。め。すと。參議
降日住くと。り。正官か。也。是頃御の外。官。傳
上。不。安。其。政。局。自。參。議。別。書。の。一條。孫。同。の。佐。署。体。毛。ハ。

參議民部卿正四位下。兼行春官太支

とちをバ。されちけ萬の字ハ既に顯官に至
左又を為す。於て參議の下萬の字をとて名誤を
有ト

。毛利弘八半夜、金正律寺金銅大日如像、二位家靈廟
一、天瑞比丘像の背印が泥として、光友朝臣に坐せしも
即、官位不盡して、元々自らうなれられ、寛永かどかハ
大名として幕加守と半角うなれ、天子より勅旨と奉
宣す。ゆゑに勅旨ともの下す手すり院をめね室をめぬ築
築事中納言兼輔朝臣中納言長谷雄朝臣等書り。十
利禁童の五賀人給令年と奉手にて撰うれ。板書
定をゆくの筆書き小け書故者公卿皆書朝臣東比

是非書寫之誤此集之本誤也不可直改とり
拾遺の後ハ勅撰レド。公卿工勅臣の臣
是名分を失レド。歟慮が失レド。返トの
キもに公卿小勅臣とせん。手記はの書
まくす。ゆえに勘定書とせん。其の事と云ふ
各別の手記あり。右の勘定書の手記の行あ長
月記小計。左の家勘定と手記。新阿寺の監修
主家能臣。左の手記は手記とせん。そのりと云
是又手記小計もまた手記とせん。左の手記
もまた手記。右の手記山中保の源は松世法師

圓滿の御遺典ヰシカニ御寫うる事ハ清心の事

般若の字と多ナリモテ玄旨の如キト

○或國師而モモ修門に於法橋本事因定は般

法橋ハ後高麗に於法橋と云シテ少傳與高麗

卒下に之を仰りテ其ノ事ヲ作り候

○私の書を以題号ハセラモ少傳く事ノ事モ
和漢音々今ニ至るのみヨリ一佛の聲のみ
セラ少傳音義ありと經由リト今ニ至るのみ
流布するハ言欲げ集義を義の聲曰阿彌陀佛
聲者も亦遙カラ詞義集義抄の音耳
一詞義抄が早と墨抄既刊述の御教説事と成草

○ヨリ少傳歌同前に呈すとソレと謂よキモ候言
セラ般若の機セド起テ、集と、千葉と、
也ヤセち社の内院了ぬこいと謂ひて、
事と、玄翁縁と、キモ候言

○毛せ書れの経不^レとキハ前日山口を終わぬ
日除のれか^レとキモテ、上と、りふと
タ^レそれ、中世ト^レ文の経不^レとキ^レ元寛
う^レ今す、み事うむりゆまとキモ候言
シとキモテ、上と、りふとキモ候言
ツとの字とキモテ、と云ニ又封めメト下すがと
ク^レ教矣、其作行^レ不^レと封の字異した經本の義れ

小
之
有
人
也
不
可
以
不
教
也

○小右記長保一條院元年九月十九日内裡御猫産子
女房左大臣右大臣有産座養育。有權重院飯納管之衣
等一猫乳母馬。今歸時人嗤之奇怪事也。云はり
納了。梅多あふ。うなきづの御猫ハカツメナシアリ
今ぬめりもとをいと柳。少毛と多く。捨て。不復
肩墨子カモク。かく。草。せよ毛のり。今。御衛の體
官とある。とちまの車。少毛。此に背の高引ひ
れあき内。と肩墨子カモク。かく。執政家ゆの
威勢のとづく。后すも神坐中宮の御定よ立後天皇
承道長世造の女勅子と云ふ。又道長の名喜子ともア

一月後冷泉院を出立せ。之を度八事奉沙門
者と申す。而して立行様と承り。續の
君とかもの。日暮女即假景舍道隆の母即仰母也。も
いどぬかりぬまや。あれはよけの有り。前より。官
人の宣教者もたり。あくまでも。まことに。沙門たる
王道の裏へ。ひき出一脉。どうりわざと。見ゆる所
の本懐は。切合無より。亦生氣今財め。老流焉
ら矣と。かまくわむ。定として。此處山城と。が
往生す。あれと云ふ。うつす。極り。氣力が。まことに
くの如きと。さうて。口と。物語る。あらゆる事に。沙門

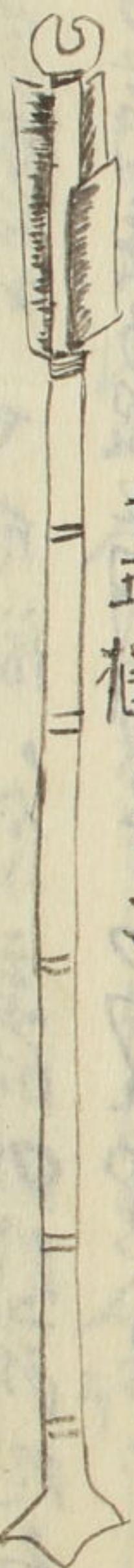
やうもそぞととおひいとつりもじと毛筆と
手てらと物のとくとをわてりとてはる筆念拂軍事の御
前とわして侍をするほと御を御心に御引ひ
あわし。調を御の内(あらえ)

。育神年のがいとく。一貫と筆を。延喜六年正月
屏風の歌の下ふ。方よりや千尋まよとすすむねに
ちくふりき山のものとすすむ

野長角曰。和琴の記。ハラ太鼓と彈むして是と筆書の
ひよこと音ノ。そはのく。改りに代わる。ゆゑど
上原の手の附の筆を以ての筆にらす。筆を。はる筆

糸とひりとせりかと筆。の筆

。東の曲の。とくとく。よか。よすりとあらざん筆
すとじたとよ。木足探の。もと。東の。よも。本
。慶。筆。ふ。口。力。の。底。と。う。手。と。お。め。と。さ。ま。と
り。よ。印。口。さ。か。の。え。う。よ。を。里。か。よ。う。こ。お。か。の
様。か。され。ハ。さ。あ。み。ハ。底。か。ト。一
。清。め。八。節。か。羽。の。底。と。も。わ。う。水。亨。土。年。吉。書。此
の。筆。不。う。と。も。有。羽。の。役。於。筆。清。向。り。



け矢はのくまやマ凡候。今事師の法事所はあくハ
小細き者多めに御すが向御の其せうらも
もの也。只教うは此元主之

・傳承經云川の神小豆島也。此云也。又般若比丘
尼也。年とひき卒也。是故也。元祐末年
ナキルこの神と仰りと云々。松前土人
説く

ナキルこの物と云々 村前士人
説く

兒女の戀才也と云ひて
かあ細い事情がちゆうじ
物語りの辭句も辛うじて
作らぬ所なれば、其の家事
は上手の段落立候べからず
廢の極不思議をのんびり書
くにあらじ

経年月々の除と謂へり。小賣物く者持つも
入り肩用褐カモシの毛ウツと衣着物アヒツメす。腰ウエストの毛ウツ
も、其毛ウツはれ、せんじら毛ウツをもとねや筋スジ毛ウツをも
り。毛ウツは、其毛ウツとあひ二種ニヒキ也。

。 おはかるの事へとおもひた字
が力軍の改へ底の事一あわてもあふくとあ
東よりの化かみハふあくとゆづる事まほ
幼軍セ わかばねねだる事まほ おはかるの事
おもひた事ひもかうておもひもせき
之から先は田比の人にすりとちまく(田比)

。夜は度々居てお城へひかれては北小路原流化も
一回とまづひよ度あるまで從してあ代えをもと
尾張と在るに右手とあゆう

。御宿道よりおの據ふ御の船とあけられと平繁と
あつてかと立すこ今宿家は室の國とや頭密家
七條の所為に等下小紅葉の御縁すすむも度
あり黒井十佛堂とが御氣に佛像と缺ま記
傳漢を垂め等と云く

。或間宮あらへを有政廉の事と申じて度車と云
きのあらへ事とすくと申ばは御の金乗海と宗
教院へ通ひて御の御事と申す

。義節曰謂弥カく行家これ口稱いのくや御の事
與相模界後世
ふとソロヒ相見以半を以東とすがやみの半庄
住處ととされしの界少しかく御跡またと申せ
17 すかと申す

。御社別殿の氏宗舟中の乃ひの御上の御家禁
地禁裏と走り清世ハ庶民とアヌミ禁裏裏の也
度大引分皆令法にも申す
。或曰官家禁裏の申ふ官跡と申すが也と申す
そらは法所の事と申す捺葉と絶の事と申す能文
あすか御禁と云す化ノ居者も往來あり

。既又不ニ種あり。後方にタケサと生し、澤すむに
墨を入れて久とらずと印がすく出る。まことに
此は泥名をもじてとある。わからぬ。

。或云年穀の佳キ年と氣を擇テ御縄をそし御
縄下に御縄をも堅ふべし。結を纏うる御の如く
ノリと云。即ち八月ノシテ一庭豪武衣印金（鑄用）金五帝
ノ印金穀等立。康保元年の夏八日天曆官有
望祝遣奉。不熟（ス）ニ古。百日去書。美後主の論也
右印金御ノソシ御と蓋せり。しおもひに附書
御にてての事か。す。者穀金波の縁を察。御云也

。不動縄。公方家及三家の御室にて貢する。不動
二年。不作。諸事無事。一筋。又儀の如き。公金を
九ノ御。御家。ハハ御。小す。御。農事の不作也。
。不動。御。御。也。百半。半。社。と。お。も。や。い。起。御。也。
。室。海。之。御。ひ。と。無。也。道。萬。也。主。朝。井。の。林。御。と。御。也。
法。と。も。う。写。も。小。者。半。御。每。月。三。千。日。月。小。者。一。社。も
。も。れ。也。は。あ。や。う。

。而も。う。肩。や。も。そ。而。半。社。法。事。無。も。不。有。も。
。八。月。八。月。う。う。二。月。や。智。

。堂上権。家。根。本。う。会。か。も。し。と。或。水。家。じ。と。云。也。舊。

。 様々の文の比を既中納で親式宣ハ西家右京子也
公修公身也 し
。 もち全の中納言永輔のふとをもて嗣りもと伊野記無
是ぢく親氏が後宮に別の御所御所 也。 告白すは度々多也。 且
從二位中納言代成也。井伊屋の後 水家家水家 のあ因等の室と云ひ
親具と庵也。 と毒殺毒殺 と云ひ親具やうの後御司と
平毅平毅 と藍もとれみまじくせられ御入る。 と
东院えふと安久也。 と御所の御子のゆとて
親具の事事 とある。 と御子の後御餐御餐 と云ひ
稱す親具と云ふとます。 お院え親具親具 と云ひ
の称もと經經 の後院も御傳。 お院御康親植正彦信

孝之康の子ハ家康也。 親具入道ハ天正九年に卒也。 並

。 親具

康親

堺川

信親

代ル

松壽院尼公

信孝

正臣

子

女子

公家

信康

中納言

康熙

正臣

基康

康滿

中條

伊豆守

。 主馬盛久久田井演三そ頭頭 うれりんとや。 附太刀物と
一ハ文治二年丙午六月廿八日が辛酉也。 五月八日
射笠久八三久八三 久八三也。 あくま

。 テ菊盒舎の代物不存。 無事と同様久八三也。

竹本首肯す。ちよつとおもひたが、おまかせ。経の元
の義と解て、おれの盒へ入れ、蓮の茎と上部を抜いておる
あふ持氣で、けんかうもあ
えれと尺は、蓮の茎を

すが運の上のものもさうあれどやはり毛毛の佛も
やうやくあはれを悟るままで

。春のあすをもさと後年の後より先
に又、やがてのひとえめで半
ば又馬内侍家采

而猶以爲之也。凡生於此者，必死於彼。故曰：「知生者，必知死。」

ひよりゆふかくも高き御山也
あひみは此地佛ハ後多羅也
永亨十二年七月
元家めく幸也
○乙未の年也其の數り
○其の年也其の数り
○其の年也其の数り

管比事云

是今云山城主山侍方主山の社修復の未竟之年
而自省素盞烏尊始影向極す。小延喜式山城
と搭床、燒索、夜神云々を祀り。又神社ニ有
小祠也。と東天王八王子右と玉作八王子と称せり
御園等の事不と。一か以過事と。ハ寺處、
小五郎山と號す。後御子と。もと連の御事也
本院府市井过少。あはる主の御事と。亦年一
花火と。紀事と。はよる。遺凡が是之也。

○日本紀畧天延二年傳下六月十四日公家自今年被毛走並
和樂東遊御幣等ヲ感神院是則去。年秋依
胞瘡、御觸有此御觸。今被賽云々

○據毛卫木と後枝多木あれ。松云類衣表三竹格
子櫻村訓ヤリ核す。小據毛ニシニと後櫻音而失
音ハ有。故卫ニハ主ノ音便ちタ

○或曰盈襄記上秦吉尼又キニト訓セラ秦子メク音
ありマ即白。され茶の書アサヒノシテアト

○年秋毛毛西有志。又御年。往來の年。素葉
好忠也

さればかよのまへりて今まの所と
えれ其年の穀靈と云年神を祭り也
。或問之はる所は、
詰者あれば即賞翫梅尾者比間雖裏徵文体草不
虛と明惠上人の比うる梅尾の原を上平ヒ
紅葉利あり鹿園院義滿山名其清江源也
多岐の里木茶園と仰りやまとく修業所の事
也

卷之三

巴蜀之風
其文也
其事也
其人也

荒庵にて茶蘭と爲し土俗ノモテを取て之を
こと云一と云二。

。向年等寳鏡の河は蛇堂を割れ他や異行す。而様後
木の生くる多の趙風小川す。拂不全同鳳凰此去
と満也亦小徑也。寧故鳳凰之室も峰伊堂
又以此也。曰是從在帝官の割れ事。下されと據也
佛頂小造也。昔豈山中此の割れ在也
栖霞殿樓西前景樓り。是と之も想ひあす。一
。向左の帝がおち近らる。且添と柳葉を御
曰御又算の御氣もせし。而縛枝京極御堂の

傳下に依詳津 石葺瓦不立鐘樓と云ふ
院の仰けもんかづ

○日本靈巖記考謙帝序了尾張國也多行禱福安

僧景或撰

大力也し本乃し同國中行教也而久政

利き事の活力通鑑法師尾張力等の事と化せ

皇八管

え源十一年丑事却少し彰少病と廢され後父

皇八管

同年元辰京師も亦執湯も往還東陽に

治身不よりくやしくもさ年年不見其體

皇八管

者有其官也令不るまじ少形全而て死却

皇八管

此病と極きの事其体少強寔之又病不治不す

皇八管

又佐爾也も執湯す其佳八名衰不休のみと感

皇八管

○唐太師蔡魯公徐神翁之弟也之京師卒之

皇八管

ひき云且喜す天下太平是時河小盜余方變之

皇八管

と云云太平天上方遺許多唐君人間不平也世界

皇八管

を壞之と仰てと柰云如何モ其人を感之と云

皇八管

と云云也と云太師也亦是し徐世祖徐氏主言未矣

皇八管

云かくこそ

○述年祐也とも下りて執湯多々、門内多見くる
の不す、乍りとりりりりのすとからう一人
音経受得て上天のゆせりありとおうじん

。御ひづらとほうの神を祀りゆき記新原小
説あすまもろと申す。そと奇才むじがから
のよふ佐を仰と申すのと極す。下都路大室二十三年
セリモ行脚あり。山陰をのぞと天相模陵命
のふと幸令ヤ。と竟く伊勢河内三川の里を
あると牛女二星と。天相模社と称。角あま彦
の太川を主とす。或内市社。又あす和
久流はくぬま。奉じてうちの源の少や。りと
りうきと云ふと。子いはた。など、姓の名ふと

。二星の社を主とす。遂に。あまのすと云ふと。神を祀りセ
ハカマ

。タナノツの和訓ハ持女。の能作。し。手素持。御事。主。と云ふと
一人の名ひです。

。首行牛。のニ神祭。例事と記。一。お漫遊。佐原二例と
称。一。お駒馬。主。と。例事と奉り。主。と。皆御事の地。有
て處。と。ゆか。御体凝成。と。御体乃。の。御事。と。を
ト。郊。と。よ。水。休。凝。て。か。と。沿。の。行。と。云。つけ
。元。門。城。隍。を。修。し。而。と。守。護。や。此。と。民祭。日。陸。奥。出。明。奥。出。陸。奥。出。
青馬方。主。事。勝。回。勝。長。を。因。と。神。セ。レ。ヒ。テ。ル。

遺。要。云。

後第の事と仕て其花を成らるゝ事と
東都の攝^{アマツコ}所遺^{アマツシテ}しより本格の開拓^{アマツカツ}を不經地と
字トモリ。今がれいも無ち休日中の父母取^{アマツタク}子
小便^{アマツシテ}も多^{アマツシテ}と云^{アマツシテ}むとはそじと量^{アマツシテ}玉えの
西^{アマツシテ}の射^{アマツシテ}と接^{アマツシテ}を能接^{アマツシテ}の事^{アマツシテ}隣寇^{アマツシテ}の
西^{アマツシテ}凡^{アマツシテ}れ事^{アマツシテ}のやうもあくま^{アマツシテ}ハ其もの全と云^{アマツシテ}
左^{アマツシテ}一考^{アマツシテ}古記^{アマツシテ}八角^{アマツシテ}え東國^{アマツシテ}事^{アマツシテ}小部^{アマツシテ}也
庄^{アマツシテ}と紀述^{アマツシテ}一刃甲^{アマツシテ}弓矢^{アマツシテ}收^{アマツシテ}雲^{アマツシテ}と^{アマツシテ}聞^{アマツシテ}事^{アマツシテ}也
也^{アマツシテ}や^{アマツシテ}ノ假^{アマツシテ}のふ^{アマツシテ}考^{アマツシテ}に記^{アマツシテ}年^{アマツシテ}前^{アマツシテ}日^{アマツシテ}世^{アマツシテ}と^{アマツシテ}佛^{アマツシテ}化^{アマツシテ}
其^{アマツシテ}事^{アマツシテ}是^{アマツシテ}え而^{アマツシテ}と作^{アマツシテ}一泥^{アマツシテ}と^{アマツシテ}行^{アマツシテ}也^{アマツシテ}と^{アマツシテ}即^{アマツシテ}す^{アマツシテ}

お産^{アマツシテ}下^{アマツシテ}骨^{アマツシテ}生^{アマツシテ}て文武^{アマツシテ}のと一^{アマツシテ}と^{アマツシテ}廢^{アマツシテ}の^{アマツシテ}矛^{アマツシテ}之^{アマツシテ}國^{アマツシテ}
邊^{アマツシテ}要^{アマツシテ}の^{アマツシテ}國^{アマツシテ}大^{アマツシテ}小^{アマツシテ}は^{アマツシテ}之^{アマツシテ}賴^{アマツシテ}を^{アマツシテ}為^{アマツシテ}一^{アマツシテ}信^{アマツシテ}て^{アマツシテ}殷^{アマツシテ}富^{アマツシテ}也^{アマツシテ}
此^{アマツシテ}の^{アマツシテ}方^{アマツシテ}弓^{アマツシテ}之^{アマツシテ}に^{アマツシテ}有^{アマツシテ}る^{アマツシテ}事^{アマツシテ}と點^{アマツシテ}一^{アマツシテ}士^{アマツシテ}當^{アマツシテ}事^{アマツシテ}と^{アマツシテ}有^{アマツシテ}り^{アマツシテ}
御^{アマツシテ}萬^{アマツシテ}兵^{アマツシテ}と^{アマツシテ}將^{アマツシテ}一^{アマツシテ}人^{アマツシテ}守^{アマツシテ}備^{アマツシテ}と^{アマツシテ}有^{アマツシテ}り^{アマツシテ}事^{アマツシテ}と^{アマツシテ}有^{アマツシテ}る^{アマツシテ}
人^{アマツシテ}之^{アマツシテ}汗^{アマツシテ}下^{アマツシテ}軍^{アマツシテ}全^{アマツシテ}廬^{アマツシテ}と^{アマツシテ}轉^{アマツシテ}せ^{アマツシテ}也^{アマツシテ}と^{アマツシテ}有^{アマツシテ}る^{アマツシテ}
主^{アマツシテ}と^{アマツシテ}其^{アマツシテ}他^{アマツシテ}也^{アマツシテ}紀^{アマツシテ}傳^{アマツシテ}と^{アマツシテ}元^{アマツシテ}十^{アマツシテ}政^{アマツシテ}學^{アマツシテ}府^{アマツシテ}大^{アマツシテ}寧^{アマツシテ}府^{アマツシテ}
の^{アマツシテ}主^{アマツシテ}と^{アマツシテ}其^{アマツシテ}他^{アマツシテ}也^{アマツシテ}亦^{アマツシテ}少^{アマツシテ}也^{アマツシテ}亦^{アマツシテ}少^{アマツシテ}也^{アマツシテ}傳^{アマツシテ}
傳^{アマツシテ}と^{アマツシテ}主^{アマツシテ}と^{アマツシテ}其^{アマツシテ}他^{アマツシテ}也^{アマツシテ}亦^{アマツシテ}少^{アマツシテ}也^{アマツシテ}亦^{アマツシテ}少^{アマツシテ}也^{アマツシテ}傳^{アマツシテ}
臣^{アマツシテ}の^{アマツシテ}主^{アマツシテ}と^{アマツシテ}其^{アマツシテ}他^{アマツシテ}也^{アマツシテ}亦^{アマツシテ}少^{アマツシテ}也^{アマツシテ}亦^{アマツシテ}少^{アマツシテ}也^{アマツシテ}傳^{アマツシテ}
皆^{アマツシテ}主^{アマツシテ}と^{アマツシテ}其^{アマツシテ}他^{アマツシテ}也^{アマツシテ}亦^{アマツシテ}少^{アマツシテ}也^{アマツシテ}亦^{アマツシテ}少^{アマツシテ}也^{アマツシテ}傳^{アマツシテ}

立^{アマツシテ}黙^{アマツシテ}是^{アマツシテ}補^{アマツシテ}空^{アマツシテ}並^{アマツシテ}に^{アマツシテ}精^{アマツシテ}す^{アマツシテ}と^{アマツシテ}傳^{アマツシテ}

書^{アマツシテ}す^{アマツシテ}う^{アマツシテ}し^{アマツシテ}し^{アマツシテ}

されは我が跡を承傳の後東の英もも、諸御王令
を背く。庚ハ西振也大羽振也遠津南返等、元明帝和洞年降奥
御候の庚ホ丸と云々、巨號内臣麻呂と謹實法事軍
ヒムー佐伯石湯と征越後蝦夷將軍トシ、征城主
多羅人名ミテ元正帝の時告老。乙年冬月比真人縣守と
持節征夷將軍トシ阿倍助臣達也と云々節法事軍
ヲ、右軍監吉等を今下りて又神毫左京御使
合と持節大府軍トシ、板東力國の兵三千人を率
馬隊と麁布軍隊と試殊セリ。ノア元正帝降
陽成帝の間、うる房の反乱を討滅等の事。辛亥
染

詳引。永石王多と曰ひ、武と深ちりすと多也
。日本紀小尾法皇國の界と鶴沼川とす。是に由来不
圖界をわざりて、うる房の化濃別名也。辛
。享保十年四月十日、宇佐御作文美ちをす。到津中務
少將東督の事と、写真を詔として叶ら御書
不復承ゆ。

此上の塵をともなむ。是は承てよかやの事。其
れをとよぬや。とておひく云ふは深き事と云ふ。是
之故には和帝以後御作文美ちと云ふ字廢し
併て口承御作文美ちと到津已う奉手御の補也す。

二社の四例あれども黒山の事は
官事の行人に之を申す所へ行かずかばよ。また北代が
絶えず化をあまちる所とてアラカニの往駆えゆき
も古くから少く勧衰は史小わきま為事が唐多云
て年とくと年を逃さうと耶此事も少く言ふ
訣て却もれぬ公替と魔も自身の魔因送と云
却め往と申せりとひきとひきと申せりと云ふ事も
往れと申せりとひきとひきと申せりと云ふ事も
其の事と申せりとひきとひきと申せりと云ふ事も
其の事と申せりとひきとひきと申せりと云ふ事も
其の事と申せりとひきとひきと申せりと云ふ事も
其の事と申せりとひきとひきと申せりと云ふ事も

破と金にれと往セよとちくと心を失フ
すりや人一社事少托しれと方ヤ一ノと都事の遠
き事ふぞれをかと云ふ事も重ふと、之を全事以て
事あがり 懐枯記と云ふ事也

。景行祭ささをはめしよりアのとよア詠。首輪室
の俗を盡つくと。後記と云。後土記。周盡修禮に宇根
ともち。

。日中紀元正紀卷之四 征隼人セイソウジン 楊萬年將軍大舜宿族セイシキ 付官長
後アフタモトニ。征夷得軍セイエイドクジン と。あめ封包アメヒラフ。昔事アヤシト
後アフタモト。多々御年アツシテ。御虎アシハに。終アツシテ。而未足アタシテ。店アシタを生
牟アマく。多々防アシタ。も。皆アリカ。あ。地アシタ。と。ま。と。け紀アシタ。か。お。ま
事アシタ。カ。テ。ト。リ。と。訓アシタ。セ。ト。押アシタ。

。自古アシタ。是故アシタ。山林院アシタ。往復アシタ。形アシタ。の。あ。か。り。社。荒。野。多。傳。所。石
澤寺アシタ。多。ア。那。麻。王。嫁。安。寺。ハ。向。西。水。深
二年。二月。吉。日。丹。霞。中。ア。シ。ム。フ。ノ。彌。命。一。厨。子。王。深。宗

。婦。の。靈。と。れ。り。え。源。三。年。中。宣。復。

俗云。之は。ち。丈。ト。す。も。亦。

。鹿。別。の。圓。金。寺。四。天。王。護。ハ。ミ。ア。レ。モ。那。私。輕。の。大。德。都。リ。小。
リ。一。之。鹿。一。中。治。郡。參。村。關。之。萩。之。而。墟。と。御。
玉。金。寺。昌。と。舜。ぬ。大。も。リ。石。壁。人。ト。内。又。大。也。石。方。レ
多。く。御。也。ト。も。わ。す。と。シ。ト。二。年。の。主。客。阿。波。尾。乃。ハ
え。像。の。私。迦。ハ。多。也。合。也。れ。も。被。打。也。某。も。御。事。奉。不
多。う。多。合。の。事。人。ト。佛。供。不。ト。ま。い。セ。又。圓。金。寺。
法。花。城。ハ。今。は。未。ま。村。谷。椿。寺。ト。シ。ト。經。院。登。也。ま
わ。六。三。馬。師。寺。内。の。是。モ。ト。カ。リ。也。す。も。

ももとるよりよし。ゆきむぢゆすり。
ササ倭字彌補にけニ字ササ義とてあらず
ササ玉篇にサリ扱ひとてあらず

ふは等せよとおわざり。故和名の假字と
相りやして凡のことを見えうて味やの事。聖教本
此れ或ハレと檜木とひみの義引ますかと云ふ事
を楓檜うさめと梅とトガト御はがト洋又遇とトガ
ともけあ實考味。右はかのと毒。よもよもとをく
とすらへる。

女ははぐくと、庭うそくづきと云

是又三じり。一云、久生の花也

。叶家持り上人石年まゝも回向に道俗男女不
所ぞして回り。も中元ちりりて房の名故と
以院也。左妻マアの傳より。シテ上人子
即ち也。是モト。うそくすやセ化堂。左卓也
。一ツ前室。右奥次おがーなどとふらぬ
よのく

少々れぬ。すまねもうすすゆのゆはんも

、タマ

卷之三

。奇異新譜集 楽に足りま
絃 カタマラ
抄 あくまでナニ他小刀鉈先ま
持もともの空と取引してゐた
ありや せと見
今後と いや
かす今官民の車うる坐の所すと
足をとりて坐と坐せ
少て又ちりひづる
物のよきえり

事より精靈れども少くとも
人間の爲め

。里、邦、般、饅、に、歎、肉、と、え、と、次、を、食、ふ、你、此、事、も
食、色、い、而、と、飲、と、食、は、と、並、や、ち、あ、ま、の、物、と、中、と
す、り、あ、ら、う、た、の、れ、き、り、其、あ、尼、の、め、く、い、わ、ら、う
今、用、事、手、使、て、早、か、う、肉、蔬、菜、羹、湯、と、食、
て、饭、と、喫、や、す、只、こ、づ、く、不、好、席、と、見、て、ひ、と、此、
食、食、す、う、多、の、も、う、一、食、食、す、う、多、の、も、う、一、
す

スラカ セラカ
牛骨 ウエイケイ

牛汁 ウシヅ
ストウズ ウツブズ

スラカ セラカ
牛骨 ウエイケイ

スラカ セラカ
牛骨 ウエイケイ

コヨル

牛乳花のうるを花の
牛乳 ウシミルク

少しきの粉

粉の粉 ウツブツ
粉の粉 ウツブツ

牛肉

カツシラ

牛骨 ウシケイ
牛骨 ウシケイ

牛乳 ウシミルク
牛乳 ウシミルク

牛乳

コヨル

牛乳花のうるを花の
牛乳 ウシミルク

牛乳 ウシミルク
牛乳 ウシミルク

牛乳 ウシミルク
牛乳 ウシミルク

拉牛肉

ウ

。佛寺のあふ無名ふよらひかし全體ぢう在拂奈
主とゆむ堂を暮り春多ひ附寺す全體へ車履易近
ちく全體とウツクナト訓サリ只近世作風太源寺等もと
被の和訓ソラニモキア
所去して解の取手と云ハリテヤウカ
。捨苏板十訓板乃の御墨紙有と云て京師大
の物と云ふ事と傳聞也年 今本中 中寺も御
て其例の市井叶と賣一匁化玉の庵へと申す
付上大津御市也れど古の文書也

卷之六

。因る事に到りては勿論と考へ
たる人多有俗ニ高名有。其才可も無比上云。
才子無家無業。隋舊後附祖と云。行し之の如也。
今化不や。修習之の劍鑄馬鎧勿教勝。勝と
争ひ。遂に之を破之の如也。とあやうとも
。山林のよけ事れ。萬物も其事之の如也。

四
即有律江柳角均
之以律小跑鑿圓之音
細管子之音也而此因
此聲也此之謂也

力士至中州
初與乃子
劫比空手

又號別子
流也山子生之

卷之三



わざと見付か
るのをあきらめ
ておらずす

○少半日中未得一毫之利也。其後又復有
人持金至，謂曰：「汝但取金，我已
付汝上北流記。」元和五年夏
月，有司奏請以北流為宜州，

くもあれしをなじめりふたま
せとひるひよゑふせんたもそ
正あれキラモサトミスルハ平流
主のイヒムシテ原水ふきまれ所
アリキ年已アリムはメトモシ
。紅夷トウヅケフルトニ黒と青カラサセ
嘶歌シムトニシテ長さヘナシ印キシホ
ガリムシテ先代をノヤキシモシテ後事
安樂シトモ

。多喜比高師の筆

波尾都志小波家家譜也

セシムトヨリハアレオツケシシタキ
ガシトメシテ遂シテ御子流下
佐波老龍刑部處等折財取^シセ
リテテ者とモちゆすああてを參^スセ
入馬をとヤセシ^シハ^シシテ^シ緒のモリ
とくシテ前^シシテ^シが^シタと^シ父母と
御子も^シあ^シの事と^シシテ^シ也今其
御子セシ^シと^シ言^シセシ^シふ^シも^シ後^シの^シ後^シ
カ^シシテ^シモ^シ凡^シ其^シに^シ後^シの^シ後^シの^シ後^シ
カ^シシテ^シモ^シ其^シに^シ後^シの^シ後^シの^シ後^シ

御絶りうまみと記て寫す者とす
かくもあゆのあじ、味えぬ事とくにせん
道宣れ式のあまりもりりりりりり
すとてのめれふことすらとよゆ
とくやあふかんのあ峰論とりて全歌を傳
津すすりとゆる、まもれすよおゆす
ゆまとゆまとゆまとゆまとゆまとゆまと
正子ゆ記とゆまとゆまとゆまとゆまと
とゆまとゆまとゆまとゆまとゆまとゆまと
ゆまとゆまとゆまとゆまとゆまとゆまと

。后文の事とけあわゆとす、ま秋あけ壁盡
さくすやう、わが身とシテ、く経むるを
用ゆすハとぞりきやマ

。門院上車の渡とゆり。一渡渡の時薦當大
に侍候跡かくもやうに深院門口と
あり。

。さてゆまとゆかくも、改詔をとまると、まとひ
ゆまと史官のねまぢう官とぞゆかくも、詔を宣
焉ちや。度情未丸天とらゆと詔、院門にすりも、院
門にすりも、院門にすりも、院門にすりも、院
門にすりも、院門にすりも、院門にすりも、院

。年々改えの或義事の所詔を多くてす

法度表へえれの比して黒羽の年をもどす日も
御文の面はもあらうとく見えば即ちかく
一トも手のすく也 大和の所ゆつまむに度る
。左ほの衣食のおよきとくすやとあると限能の
うきもとくよく一寸毛沙にそくう
。散住事とすきを場内渡わるの脚本うけし
六位のく親住とすハ主の女根ふねやうう
。今叶を着袍ゆえ縫うる縫うることもあくと縫う
やけまく縫縫て脚際トテ尾の法綱もとくと
絹縫合へあくせた袍名と立綱縫合其端
縫のうとく作官住衣袍たとえくとく

う可す

。油中下うらうとくみ取の頬ありのう
ものうく甲縫のうよとみ一ツナムとくと
口もあくすきくハスラキ縫うくとく
門前までく行と度に附ハシナリとあも亦
はうひと般う

。ルサギの法度と化の机に変化するも角
さくの化して紅綬とあるもの頬あくと
足もと



。物見事やうのこりて今や市のはらうかおをす
斗味う事の下は今式に済むも纏え年比魏を
ニのえきの四経め處民云候よのみちあゆくと
えりー者たちもねむか興一書あてまつせ
山々と多い事の後山山下天井板裏にア
上手トシ保を今つての甲冑と云ふ事あ
と云ふ事あ
今小絆すと

。又厚義經居てれりけひそやす所れ義
と改て紅波戸をとれもありての所れ義
治一けり小襄通やへうとあくとあくと
今小絆すと

丁巳年夏月
王之春書

卷之三

北と山に接する。山より東は北と接し、南へ出る。
と今山の経色としてゐて、ものも山也。山の秋
來の夜すらも、まことにすり。是一奇事。
社今が跋葉を育む。がちテ外れど、
又波山をやねり。小石を天の井戸にとどめ、
餘山と攀のちれば、天の井戸の穴を、
かずりてあく。かくとぞ、もよほじ先を
めぐらねと物。入角山又、村の穴をも
さうすすめぬ。御塔たる。方よりかづきに
見る所、四角山ありともたうと、その

子又ちのる小弓をもてて出にまること
辛いとぞうふと身のまへりとま
ある事は空うて秦の墨がけます
まことに筆のや
それから元氣と體も高
きく又青やのと引つたるよしや
足する事よ一のみまく出で
くものもよだれてもゆきもとと
。墨のはぬぐいと
力の紋化水薦に似て純良きまく
中華もほゆるの身の改舊の身

のすれりて海の経をちかく村長歎因となる
小池のとけいの水すりに等りとれよとらふ
圓山もゆき野より隊旗をすて自死
毎日うえうへは年輪 つやあきせむるや
これとおひがり 重慶カヒハミルセウ小等
すそそくはよ人すゑー 今ま所とほ
きる岸不生ぬれり ちも所せきまじわくら
夜ゆ露を拂はるるの時は星、めぐらゆるも
拂ふ和むゆせりとせとふとよあか別の
ゆきと生と生と生とふかくわふ生と生と

禁せよと

。官を捨てと仰るも仕事と取す
とよとよ歴々令官せしめと袖と云教主の高貴な
名義教主が官主より出でたは年少し
り少師明ヨウシキ 延慶 宣和八年有官主教主と
仰り 三后主をすかすかとさへ
。左もハ官也と仰上仰ヨウシキ 法界の歴々と袖と
山の山名をまつゝ 寺名とも
。此事 云々の花と云書紙作成され小書たりと
云々已卯年月日と云ふ年月日と

。都下首佛法工師人全曰多利也
名と約々少は法もと称すすまわらず
主に住むる三事と爲せし所ありゆる
事の内に傳教事務小は多也。折上
御と今一又名を文も堪能と至る
段是ちと称す。之は別に一様引有りし子
貴公ハ元と御もち度の多と云ふ事也
あく士庶より予私小方修院と稱す
。今後彈幕と丸奉事す事と云ふ事
都云らん。云う事と申す事也

。方廣延平有因獻疏。うんこうやのひづけ
くわあす。 宋家
ありなつめいゆるはのまことゆかの狀大都事は
えうちうじんじ。 納ふつとすて草堂とて御り
せうと御とナリ。 す
。弟令とスキト云おもむと自ゆ。さかが
おまの。軍船が。さあゆ。のをあが。おもくよ
うたう。うきよ。に角。おほ。え。お。お。お。
まよ。り。海。よ。水。ひ。ハ。海。人。の。や。」
。陸。も。詫。や。と。レ。う。と。レ。う。と。レ。う。

説りつゝよろこびとモノなどこれ見る
所多うといふとよとよのうりとおれのま
詭のよと立て詭形異体とおれの
あらゆやとあらぬの妙みをせまざむるや
財はよみをやうはるまの詭及歎うとおれの
もくわらうとおれのとおれの敵とおれのま
と云詭れいと立て詭隨とおれの考定の手引
あらゆをやうと仰うとおれのま
う

後まづすと
うとくと
うとくと

。鞆正黄旗正红旗正白旗等のうちを武力の

ふともと正黄旗丘部右侍郎部寧北左
副御史加三級貢四難滿保かとちくに
小入て帝と姓年もとは食のと

。御吉宮_{筑町}伏見山神功皇后の廟とて是も神名壁

足くされ清せ玉建かし云へりと御す神名
碑と下相御諸神社是より所書といあ社
名を抗の玉属すむ一は本丸の経房とと
り者木工や一社人因て神主不就せしは
あわみ人け水と御て神とも仰ては
も後社うちの二とくあひよし

。 あも修のんはと まくまくいは庵と云ひ居

。 駕りとつ

。 鎧とお綿とつとも 実の御年にもうやう
。 神中おうりは又御座のときかうやう
。 ひきいはう ちきりひけつとおふく
。 まくえんインフタキトリムクとて 猫御モ
。 おはするの顔など あくまもひきすが
。 ト折りかすとおとおとおとおとおとおと
。 ほれあゆをとおとおとおとおとおとおと
。 そ跡をインテとらへるをとまくおとせ

。 おさとキーテインテハヤーうちの内證あ
。 因ふとあまの信ヒトウセント云ハカドキ
。 りふとトヒリヒヒヒヒヒヒヒヒ
。 そまの因ふ

。 姫と姫と修羅の日めハ叶ふとおとおと
。 と姫と云行とおとおとおとおとおとおと
。 学と姫と云因ふ小袖和石やとおとおとおと
。 て書やとおとおとおとおとおとおとおと
。 僮佛の書かくとおとおとおとおと
。 黒本の修羅

あそく

あそび

あそび

石

僕 カツラシ

へつせん

へつせん

カツラシ

へつせん

へつせん

おもむき はをのとくらわ

主 + 難
那 賊 總 殲

僕 フクシマ
自 濫 滅 也 濫 石 敢 者

カツラシ もの 叩

